

小生の愛読書に、塩野七生氏の「ローマ人の物語」があり、その第X巻が「全ての道はローマに通ず」で、ローマ人の土木の才に付いて縷縷述べてあり、ローマ勃興の基盤を為したものは、帝国津々浦々まで張り巡らされた幹線道路であるとの事に気付かされた。そういう意味においても、北海道の発展に道路が果たした役割は大きいと思う。インフラの最たるものはやはり道路だ。最も、北海道で、今以上に新規の道路が必要かどうかについては異論があるようだが、・・・。

北海道における道路史というと大袈裟だが、5師団に関係する地域に焦点を当てて、それを略記する。

松前から陸地で蝦夷地に行こうとすれば、東蝦夷地では、茅部峠から大沼の北を経て森に進出して、海岸を歩行し、礼文華の険は船で海を渡り、これより東は、また歩行したのであるが、様似、幌泉、広尾間には、有名な難所が打ち続いて、平穏な日、岩礁を伝って辛うじて通過することが出来る道であった。仙鳳趾、厚岸間は、船で渡るのが常であった。

#### ① 蝦夷地道路開削の嚆矢

寛政10年(1798)支配勘定近藤重蔵が、東蝦夷地を巡視し、広尾まで帰着した。ところが上述の如くに、幌泉に至る間は海岸険難の所が多く、且つ偶々風雨に阻まれて滞留数日に及んだので、道路を開墾しようと思いつき、十勝ルベシベツからビクタヌケに至る山道3里弱を開削した。これが蝦夷地における道路開削の嚆矢である。この時は蝦夷地全体が松前藩領であったのに、重蔵は独断で実施したことになる。彼は木札を立て、往来の人に示した。従者下野源助は、記文を作り、板に刻んで十勝神社に納めた。道路開削の記念すべき木札及び開墾記は、共に所在を失っているが、開墾記は摩滅甚だしきで再鑄(さいせん：再びノミで彫る事)し、十勝神社に奉納した。重蔵の新道勝示(ぼうじ：木札)はなくなったが、幸いに拓本が残されている。十勝神社は、十勝最古の神社であり、広尾町字茂寄に所在し、祭神大海津見神で、県社格の神社である。

写真は、平成14年12月22日十勝神社で撮影。開墾記は偶々宮司宅に訪いを入れたところ、御息と思しき男児いにより、開墾記を見せて貰い撮影をさせて貰った次第である。(左：本殿、右：開墾記)



## ② 寛政・享和（幕府直轄）時代の道路開削(5師団に関連する部分を主体に)

幕府が寛政 11 年(1799)に東蝦夷地を直轄地としたことは前号で述べた通りであるが、ロシア人の北辺出沒に伴う警備や産業上の必要から道路の開削を急務の一とした事は当然であったろう。この為、最上徳内等を始めとする者に工事を担当させて、使番大河内正寿が様似に出張して、工事を督励した。南部から杣夫、人夫を募集して様似山道、猿留（サルル）山道等を開削し、同年秋には、様似から釧路まで馬を通ずることが出来るようになった。その後、次第に改修して東海岸一帯は、天候の不良な日でもともかく安全に交通することが出来るようになった。

### ● 様似山道(様似から幌泉：えりも町歌別)

頗る難所であったので、寛政 11 年山道を開削した。風雨の際は依然として往来困難であった為、享和 2 年南部藩が修築を願い出て、約百日を要して竣工した。里程は 3 里弱。

### ● 猿留（サルル）山道

(幌泉からビタクヌケ：広尾町とえりも町の境界,広尾からビクタヌケまでは近藤重蔵によって開削されていた。)

従来海岸に沿って襟裳を迂回し、しかも庶野、猿留間は、海岸は岩礁が多く、頗る難所であったので、歌別からウタベツ川の溪谷を遡り、トヨニヌプリ(豊似岳)の中腹を通り、猿留川の中流に出て海岸に至る道路を、幕府普請役最上徳内が開削した。猿留峠は、江戸時代、礼文華山道の礼文華峠、雷電山道の雷電峠と共に蝦夷三険の一つと謂われた。

### ● 釧路・仙鳳趾間

道路は 9 里余り、峻険な山はないが、海岸一帯は、岩石が険しく、往来が困難な所が少なくなく、寛政 11・12 の両年に難所を開削して馬を通ずるようした。

この他にも、小開削、小修築を施し、風浪の激しい日でも陸上人馬の通行には差し支えないようにした所が多かった。この結果、従来は択捉に行くのに函館から 270 里から 234 里余となった。

海岸に沿った道は、斯様にして開削されたが、然しなお険難であり、内陸に道を開こうとする気運が起こったのは、当然であろう。然し、その実現を見るのは、明治期囚人の労役によるのを待たざるを得なかった。(朔東からの次号で紹介する所存)

## ② 文化年間の道路開削(管内関係分)

### ● 仙鳳趾・厚岸間

この間は、船で厚岸湾を横切り、その間約 2 里に過ぎないけれども、風浪激しい時には渡航が困難であったので、厚岸在の者の建議を受け入れ、文化 5 年に 5 里半の陸路を開削した。

● 網走越え

今の釧路市庁庶路から入り、舌辛太（シタカラブト）、阿寒湖西岸を経て釧路・北見国境の山脈を越え網走川に沿って下る新栗履に出る、約46里の道程である。文化4年に開削に着手し文化7年に竣工を見た。

● 斜里越え

根室場所標津から標津川に沿って遡り、北に折れ、ルチシ嶺を越え、ワッカオイを経て斜里に出るもので、下蝦夷の道であったものを文化年間に修理を加えたものであり、道程37里余り。

(参考：新北海道史、北海道郷土史、各種HP)